



戦後知識人と「悔恨共同体」：財団法人『二十世紀研究所』と清水幾太郎、丸山眞男、福田恆存、林健太郎（特集1 社会学的説明か「社会学的言い訳」か：個人と社会をめぐる現代の議論から）

松野，靖子

(Citation)

社会学雑誌, 40:68-83

(Issue Date)

2023-12-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100486323>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486323>



特集1 社会学的説明か「社会学的言い訳」か——個人と社会をめぐる現代の議論から

戦後知識人と「悔恨共同体」

財団法人『二十世紀研究所』と清水幾太郎、丸山眞男、福田恆存、林健太郎

松野靖子

関西学院大学社会学研究科大学院研究員

一 はじめに

戦後間もない時期に知識人を覆っていた精神状況に「悔恨共同体」としての自覚がある。彼らは、戦争へと国民が一つの方向に突き進んだことを知識人として反省していた。そうした思いから清水幾太郎を中心に当時の社会科学・人文科学のトップクラスの知識人が集結し、財団法人二十世紀研究所が設立された。講演会は、当初は盛況だったが長くは続かず、次第に生徒も集まらなくなり、二年で早々とそれらの活動は休止された。

二十世紀研究所の所員らのそれぞれの思想的立場はその後、異なる方向へと向かうこととなる。一時は同じ「悔恨共同体」としての精神的態度を共有したメンバーらの何がその後の思想的立場を分けたのであろうか。

戦後の日本における知識人の思想的混乱のなかで生み出された二十世紀研究所の活動や所員らの思想の形成要因となるものを追求することは、日本における知識人の社会的責任、あるいは国家や社会に対する知識人個人の責任を論じるうえで重要である。また、一度は「悔恨共同体」として精神的態度を共有したにもかかわらず、やがて瓦解したという事態が、今日の知識人論や共同体論、あるいは社会的・社会思想的断絶について考えるうえで示唆がある。

以上より、本稿では、二十世紀研究所の設立経緯、活動と衰退、その後の所員らの思想的立場を分岐させた要因について順にみていくこととする。

二 「悔恨共同体」からの出発

二五五・六

戦後、日本の知識人らの多くが、社会全体が戦争に突き進んだことに対して、なぜそれを止められなかったのかという後悔の念をもっていた。戦争を賛美する立場も林房雄らのように存在した（林、一九六五『大東亜戦争肯定論』）が、多くの学者や文化人らは敗戦の現実に向直し、「なぜ、こんな悲惨な結果をもたらす戦争をしてしまったのか」「私たちの国には、いったいどんな欠陥があったのか」と問いかけていた状況があった（奥武、二〇一八：四一）。丸山眞男は、こうした知識人の感情全体の集合を「悔恨共同体」として以下のように述べている。

我々の国にはほとんどいうに足るレジスタンスの動きがなかったことを、知識人の社会的責任の問題として反省せねばならない、もしそれが日本における権力や、画一的な「世論」にたいする抵抗の伝統の不足に由来しているならば、…新しい日本の出発の基礎作業を始めようではないか。—そうした考えから「これまで通りではないけない」という気持ち：知識人は専門の殻を超えて一つの連帯と責任の意識を持つべきではないか、そういう感情の広がり、これを私ばかりに「悔恨共同体」と呼ぶ。（丸山、「一九七七」一九九六…

丸山が指摘するように、こうした当時共有された憂いは、その後異質な思想的立場へと分岐していく知識人らの間でも、戦後一時は共通の問題意識だったのである。戦後の言論や結社の自由化も後押しとなり、知識人はさまざまな「悔恨共同体」集団を形成し活動をはじめた。

まずは敗戦後の二ヶ月ほどで、瓜生忠雄、内田義彦、嘉門安雄、櫻井恒次、中村哲、丸山眞男ら若い世代による青年文化会議が結成され、機関誌『文化会議』を発行する。彼らは多かれ少なかれ被害者意識と世代間発想とを共有しており、ここを起点として、さまざまな文化団体の母体になったという。他にも同時期に、この上の世代によって「真摯なる研究と活発なる実践を通して高度の文化を築き平和国家日本を建設して国際親善の実を挙げることを目的とする」自由懇談会が発足され、機関誌『自由懇談』が発刊される。翌年一九四六年一月には、民主主義科学者協会は旧プロ科系の小椋広勝、旧唯物論研究会の古在由重、旧『歴史科学』系の渡部義道、自然科学系の柘植秀臣らを中心に「一、人民大衆の科学的欲求の高揚と結集、民主主義的科学の建設、二、封建的軍国主義的、ファシスト的その他一切の反動的思想並みに科学に対する闘争、三、科学的研究、発表、並びに活動の完全な自由の獲得及び擁護」が目的と

された。

この翌月（二月二十八日）に、財団法人二十世紀研究所が発足される。「社会科学および哲学の研究と普及」が掲げられ、一般向け講座にて、原書講読など当時の大学にひけをとらない知的レベルのテーマが組まれた（竹内、二〇一二・一八二）。しかし二年ほどで衰退する。またこの年の五月には『思想の科学』が、鶴見俊輔、鶴見和子、都留重人、宮城音弥、渡辺慧によって創刊される。二十世紀研究所と『思想の科学』によって、戦後はじめてアメリカの社会科学のプラグマティズム、社会心理学が本格的に輸入される（石田、二〇一三・一七六）。『思想の科学』は、「欧米の最新思想の紹介を積極的に行い、人々に新しい時代の到来を実感させた」（奥武、二〇一八・六〇）という。また「生活者」としての大衆に目を向け、多くの執筆者を育て、論壇誌としてもユニークな存在だった（奥武、二〇一八・六一）。一九六一年二月、当時の版元の中央公論社が「天皇特集号」を廃棄するという事件などはあったが、一九九六年五月号まで自主刊行された。

一九四六年の十一月には、左右の全体主義と戦い終戦前に亡くなった東大教授で思想家の河合栄治郎の理想主義に共鳴する若い学徒らによって出発した社会思想研究会が立ち上げられる。主な所員は、山田文雄、土屋清、猪木正道であった（石田、二〇一三・一七六）。河合の影響下にあっ

た社会思想研究所は、イギリス思想に力点を置いていた。こうしたアメリカやイギリスに新たに力点をおく当時の集団は、戦前の科学が主としてドイツを志向していたのに対して新しい多様な刺激を社会科学に与えるものだったという（石田、二〇一三・一七七）。

また、このほかにも『世界』（岩波書店）などのさまざまな総合雑誌がうまれていく。

このように当時は「悔恨」の思いを実際の行動に移し、さまざまな知識人らが集まって、活動組織をつくっていったのである。また、参加する集団がいくつかある者もいた。

三 財団法人二十世紀研究所設立の経緯と講演会活動

一九四六年二月二十八日の二十世紀研究所の創設は、偶然の要素が重なったものであった。はじまりは、清水幾太郎に巨額の活動資金が手に入るところからである。

清水は読売新聞論説委員をしていた一九四三年、太平洋協会のアメリカ研究室にかかわりをもち、そこでハーバードなどで学んだ英文学者の細入太郎（当時は立教大学文学部で教えていた）と交流していた（奥武、二〇一八・二五）。太平洋協会は、一九三八年、鶴見俊輔・和子の父親である鶴見祐輔が中心になってつくった国策機関で、日

米開戦後、アメリカ研究室をおき、研究室には、鶴見和子、坂西志保、都留重人らがいいた（奥武、二〇一八・二六）。

二十世紀研究所発足の経緯は次のとおりである。細入が兄から「何か世の役に立つように使いなさい」と当時の百万円の資金（現在の貨幣価値に換算すると約四千六〇万円）を渡され、清水に相談した。知識人としての反省から社会に貢献できることをしたいと考えた清水は「思想関係の塾のようなものを作りたい」と思うにいたったという（清水・川上、一九七一・一八七）。清水は東京大学総長を務めた社会政策学者の大河内一男（当時は経済学部教授）にも相談し、正式に二十世紀研究所の創立にいたる。

こうして、さまざまな所員が集められることになる。彼らの多くは、清水の誘いを快く引き受けた。一九四七年現在の研究所員の名簿には、清水、大河内、細入の三人の創立メンバーに加えて、丸山、林健太郎、文学者は福田恆存、中野好夫、高橋義孝、社会科学者は、飯塚浩一、高島善哉、民法・法学者の川島武宜ら。このほか久野収、真下信一、心理学者の宮城音弥、物理学者の渡辺慧といった名前が列挙されている。

こうして、一九四六年二月二八日に東京で財団法人二十世紀研究所は設立された。文部省に申請を行う最終的な意思確認「設立趣意書」にて記載されている基本理念には、以下のように記述されている。

新日本の文化的発展のためには広く少壮青年に中正かつ良心的な思想的訓練を与え、以て複雑多難なる世界に処すべき我が国の進路を探索せしむることが急務である。（中略）本研究所は人文科学各分野の有力なる指導者を中心とした研究団体を組織し、これに必要な研究室その他の設備を整え将来日本の人文科学の進展に寄与し得るがごとき少壮有為の青年研究者に指導と援助とを与えて新時代における我が国文運発展のための不可欠の基礎的事業を行わんとするものである。（『二十世紀研究所（設立）20年度』）

清水によると、研究所の正式な目的は「社会科学および哲学の普及」である。そのことを「敗戦直後の開放や混乱が強く要求しているように思われた」（清水、一九七五・三〇五）と述べている。ここには、民衆自らが考える力を育てようという啓蒙主義的な考えがあったといえる。

そうして、一般向けに「二十世紀講座」「二十世紀教室」が開かれ、当初は多くの参加者が集まった。講座として、「原書講読」と「講義と研究」が開かれた。「原書講読」では、アダム・スミス『国富論』を大河内一男、ヘーゲル『歴史哲学』を清水、『共産党宣言』を吉野源三郎が担当した。「講義と研究」では、「社会学の根本問題」を清水、「社会生活の心理」を宮城、「政治とは何か」を丸山、「歴史の研究法」

を林、「ドイツ文学の研究」を高橋が担当した。

また、講義を公刊した出版物には、清水・久野収『プラグマティズムⅠ』、桑原武夫宗像誠也『清水「プラグマティズムⅡ」』、岸本誠二郎『経済学の基礎理念』、林『歴史学の方法』、高島『経済社会学の構想』、原田鋼『政治思想史』、蟬山政道『政党の研究』があった。

盛況だったころの具体的な活動は、次のとおりである。まず地方公演「二十世紀講座」は、一九四六年七月一九日～二一日、金沢、福井、高岡の各市。参加者は、清水、大河内、中野、宮城、丸山、細入。一〇月二六～二八日、京都市。参加者は、清水、大河内、林、宮城ら。一二月七、八日、京都市。参加者は、中野、飯塚、岸本誠二郎（所員で経済学者）、湯川秀樹。一九四七年二月一五～一七日、名古屋と愛知県刈谷町。岸本、宮城、丸山ら（人文科学委員会、一九四七・一五二）。

戦後は、知識人らが新たな研究活動にいそしむに限らず、社会全体が活字に飢えていた時代でもある。つまり、一般大衆もまた新たな知識を求めて意欲的だったのである。例えば、一九四七年七月一九日、『西田幾多郎全集』の第一巻が発売されたが、発売の日の未明から人々は岩波書店営業部前の道路に寝て、販売を待っていたという。最初の方に並んだ人は三晩泊まり込みで発売を待っていた（奥武、二〇一八・五四）。また、丸山も当時の状況について「純

粋に『聖戦』と『神州不敗』を信じて出陣した、高校・大学の学徒兵たちも、青年は青年なりに無知と無批判からの脱却を志しました。これが空き腹を抱えながら哲学書や社会科学書を買うために本屋の店頭に行列を作るという光景が方々にみられた所以だろうと思います」（丸山、「一九七七」一九九六・二五五）と述べるように、知識人だけでなく、新たな知識への意欲は一般にもおおいに求められていた。こうした状況のなか、二十世紀研究所も知識を求めた人々が寄せかけ、当初は盛況であったのだと推測される。

しかし、次第に客足が遠ざかり、規模も縮小せざるを得なくなる。「二十世紀教室」の第三期（一九四七年五月～六月）は、講師の数がわずか六人だった。第二期（一九四六年～十一月）の一七人から一気に規模が縮小している。地方公演「二十世紀講座」も、次第に生徒が集まらなくなってくる（人文科学委員会、一九四八・一七六）。最終日は四人しか集まらず、急遽中止したという（鶴見・清水、一九六八・一三六）。そうして、大学や総合雑誌の機能と権威が回復していったことなどを背景に、一九四八年暮れ、清水は研究所の「普及」活動を停止し、事務局員を解雇する（庄司、二〇二〇・一四）。

衰退の理由として経営自体に難があったことを清水はのちに語っている（清水、一九七五・三〇八）。また石田雄は、

「悔恨共同体」全体が衰退する社会状況があったとし、「『民主主義』の意味をめぐる政党間の対立の激化とともに『悔恨共同体』はイデオロギー別の集団に解体していく」(石田、二〇一三・一七七・八)と分析する。

また、実際、講義内容はどれも難解な西洋社会科学の理論などであり、そうした学問の下地のある生徒であればまだしも、原書講読なども含め、一般大衆がついていくことができる水準のものであったかどうかは疑問が残る。『思想の科学』が、生活者の視点に合わせた姿勢を保ち、長く存続したこととの違いがこのあたりにもあるようにも思われる。

そもそも参加者が本心に講義に関心をもつて集まっていたかどうかも疑わしい。当時は旧来の教育機関の権威が揺らいでいた時代であり、そうしたものの代わりを二十世紀研究所で得られると思ひ参加した人々もいた。講演会の際に参加者から免状(修了証書)を求められたと清水は回顧している(清水、一九七五・三一二)。

また、所員らは「悔恨」の感情こそ共有したが、彼らの考えの基を辿ると相容れない要素をもっているようにも思われる。こうしたまとまりのなさも、二〇世紀研究所の早期の衰退に関係があるのではないだろうか。次章では、所員らの思想の根底にある相違についてみていきたい。

四 閉会とそれぞれの思想的立場への分岐

——清水幾太郎、丸山眞男、福田恆存、
林健太郎のその後

二十世紀研究所結成当初は、所員たちの内輪の議論はおおいに盛り上がった。所員らが地方に行った時、旅館の二階の部屋で夜遅くまで大声の議論が続き、階下の泊り客から「いい加減にしろ」と怒鳴られてようやく終わったというエピソードもある(清水、「一九七五」一九九三・三一一)。当時(一九四六年時点)は、清水三八歳、丸山三一歳、福田三〇歳、林三三歳という若さもあり、林は「誠に新鮮味と才気にあふれた個性的な集団」(林、一九六〇・一九八)であり自由な風潮であったことも語っている。清水は、「誰もかれもよく議論した。テーマの数は多かったが、どのテーマから出発しても、結局何時も同じ一つのテーマに流れていった。それは、『科学と価値』というテーマであった」(清水、「一九七五」一九九三・三一一)と回顧する。所員の間では、人間の行為において主たる役割を果たすものは、科学であるか、価値であるかという点で分かれていたという。

戦後の知識人の「悔恨共同体」として、一時は問題意識を共有した二十世紀研究所の成員らのその後の方向性は実に多様である。清水は「正直に言って二十世紀研究所で得

た友達を、平和問題談話をやってく過程で失いましたね」(清水・鶴見、一九六八・一四三)と語る。林は、『二十世紀研究所』はその後単に消滅したばかりでなくそのメンバーは全く思い思いの途を辿り、文字通り空中分解の有様である」(林、一九六〇・一九九)と所員のその後の立場の分裂を語っている。

二十世紀研究所には、主要な戦後の知識人が多く在籍したが、本章では清水、丸山、福田、林の相違点をみることで彼らの思想の分岐点に存在するものを明らかにしたい。

四・一 清水幾太郎の転覆戦略

まず戦前に遡るが、清水幾太郎の社会学への関心の契機を参照したい。清水は東京の下町育ちであり、「微禄の境涯から抜け出そうという気持、貧しい、汚い、臭い場末の生活、アナキズムを初めとする社会思想の断片的知識、関東大震災で丸裸になってしまった身の上、捌け口を探していた荒れくれたエネルギー……そういうものが積み重ねられていたところへ、『社会学』という小さな火花が落ちたのである」(清水、一九八五・二二〇)という。このように清水にとって、「社会学、そしてマルクス主義が『下町と山の手との間』の道になるという先の言明は、社会学やマルクス主義を武器にして山の手知識人のなかに入り込み、山の手文化を食い破るという宣言と同義であった」(竹

内、二〇一二・七九)という。

清水は一時、社会と個人の関係を個人の平面からみるプラグマティズムやアメリカの心理学に関心を示す。ジョン・デューイの哲学は庶民の哲学といわれたし、社会心理学は、分析対象を群衆や世論、マスコミなど卑近な出来事におくという、一般人へと視線を下げたものであり、教授ではなくすでに文筆で生きるジャーナリストには親和性が高かった(竹内、二〇一二・一二八)。当時は「哲学的人間というものが」が流行しており、大仰にドイツ哲学の文献で飾り立て、「深遠と深刻さを押し売りするようなものであった」¹⁾「その批判というより、その反感に唆され」ていたことが背景にあるとする。「二十世紀講座」でも彼はプラグマティズムについての講義を担当する。

この後、清水は「諸組織への要請」という文書を革新政党や労働組合、平和団体、学生団体などの責任者に送付するなど、革新派として中心的に活動したといつてよい。六〇年安保後、思想運動を展開しようとした清水は、マルクス主義をつきつめて考えるという方向に向かい、現代思想研究会を結成している。

その後も、清水は総合雑誌、女性誌に女性のための人生論を書いたり、銀座の町の対談に出たり、週刊誌や女性誌のグラビアにも登場しているように、ジャーナリズムで活動する。そののちに保守派へと転向し、進歩的文化人批判

をしているが、そのことが時代迎合的であり、思想の一貫性を欠き矛盾がみられるとして、福田に「近代日本知識人の典型清水幾太郎を論ず」（福田、一九八〇）のなかで批判されている。林もかつては「二十世紀研究所をつくった当時の清水氏はまことに聡明という評語の当たる知性派で、あらゆる独断的なもの、公式的なものに対して常に懐疑と嘲笑とを浴びせかけていた」と評価しているが、その後の清水の活動に対しては「清水氏があいう型にはまった『平和論』を叫ぶのはどうも理解が行かないのである」（林、一九六〇…一九七）というようにかつてとは矛盾する立場を共感できないとしている。

こうした立場に転向がみられる清水は、一見、時代に迎合し一貫した思想がないようにもみえる。しかし、もともと清水は下町庶民として、知識人としての成功は、転覆戦略の成功にあると考えていたことを振り返ってみると、社会学を志したのも、マルクス主義だったことも、庶民の視点のアメリカの社会科学に関心を示したのも、一般向けメディアに登場したのも、保守派に転向してからの知識人批判にいたるまで、かつての上層階級への抵抗が根にあったということができるのではないだろうか。

竹内によると、清水は丸山の二十世紀研究所の公演で、感心とともに違和感をもった場面もあったという。この時の丸山の公演内容は、「本来のインテリ」と「亜インテリ」

というように知識人を階級によって二類型に分け、軍国主義を分析するものであった（竹内、二〇一二…一三九）。続いて丸山をみることで、彼らの思想の差異に内在するものをみいだしたい。

四・二 丸山眞男による日本の民主主義の可能性の模索

戦後の「悔恨共同体」の存在を指摘した丸山自身について、都築は「丸山の戦争責任論は、その所在を天皇及び重臣、陸軍や革新官僚にのみ帰して、彼らを排除すればよいという議論でもなければ、またいわゆる一億総懺悔でもない。彼は治者と被治者との責任の質的相違を前提としたうえで、なんでそう突き進んだのか」（都築、二〇一七…二六二）を考えたのだという。丸山は次のように述べる。

未だ政治的に啓蒙されていない、つまり批判的な、合理的な組織を平素教えられていない非デモクラチックな大衆は、きわめて一方的な考え方と行動しか教えられていないからとかく強硬論に支配される。ロシヤ討つべし、支那討つべしといった勇ましい議論が大衆の中から出てくる。また、そういうような議論しか出てこないように政治意識を低く止めておいたわけだ。（丸山、「一九四六」二〇一五・四六〇）

丸山は、日本の民主主義が機能しなかった日本独自の思想的土壌を問題としており、「日本における近代的思惟の成熟過程の究明に取り組みたい」と考えた（都築、二〇一七・二五〇）。したがって、二十世紀研究所の後の学生運動や安保闘争時には、清水のように積極的にかかわるというよりも、日本の思想研究に閉じこもり、民主主義の実現の可能性についての研究に注力した。丸山は、戦後進歩派の象徴的存在ではあったが、学生運動時は清水のように学生にシンパシーを示すわけではなく、むしろ丸山が糾弾の対象だったというところに、全共闘運動の戦後思想史における位相が読み取れる（奥武、二〇一八・二一〇、一）。丸山は、岸内閣による強行採決は議会政治のルールの破壊であるとして、反安保よりも民主主義擁護に目標を転換した（竹内、二〇一二・二四六）ように、学生運動そのものを擁護することにそこまで意味を感じなかった。丸山は清水から「諸組織への要請」を読むように手渡されたが、帰宅して読んだ丸山はそれほど賛成できずに結局は賛意を表しなかったというエピソードもある。

丸山は六〇年安保闘争のすぐあとに研究室に退却し、一九六一年一〇月から翌年四月までハーバード大学特別客員教授として渡米し、アメリカやイギリスなどに滞在した。帰国後は、ベトナムにおける北爆に抗議する声明に加わったりもしたが、基本的には本業に専念し、「歴史意識

の古層」にいたる東洋政治思想史の講義の構想を練る。丸山（一九五六）の言葉を使えば、「夜店」（時論）から離れ、「本店」（日本政治思想史研究）にもどった（丸山・杉山・石川、「一九九五」一九九八・二八八）。

丸山が問題にしたのは日本の「鎖国」、とりわけ「精神的鎖国」である（中島、二〇一八・二〇）であり、「現存在を超えた目に見えない価値にコミットしないと、目に見える存在に引きずられて考え方を変えてしまう。結局、状況追従になっってしまう」（丸山一九七九・六四）と閉じた共同体に全体主義の危険性をみいだす。丸山は、「世界のロジックと価値体型に深く浸潤されている人々を動かして外に連れ出す」（丸山、一九五三・一二）ことの難しさを認識しつつそれを超える方法を模索していた。

丸山は、一九〇〇年ごろからの近代日本の特徴として、労働者を「原子化の傾向」、知識青年を「私化の傾向」に位置づける。丸山における労働者大衆はそのままでファシズムに容易に結びつく存在であり、抽象化された存在だった。竹内はこのことの一因として、丸山が上流家庭の山の手育ちで新聞記者丸山幹治の次男であり、第一高等学校、東京大学法学部卒、同学部助手、同学部教授という進歩的文化人の代表格の歩みがあることを挙げている（竹内、二〇一二・三一九）。

また竹内は丸山の軍生活でのトラウマ体験も指摘してお

り（竹内、二〇一二・三一九）、一般階級に対して自我防御をせざるを得なかった可能性も分析している。丸山は、入隊後朝鮮に送られるものの脚気罹患のため軍隊の半分は入院生活であった。丸山は、軍隊での階級は終始最下級であったが、それは丸山自身が自らの選択で軍隊に入ったわけではないという意志の元、他の高等機関修了者たちのようには幹部候補に志願しなかったためである。このことが元で、反戦思想の持ち主ではないかと疑われたという。そうして、軍隊では些細な理由から暴力を振るわれたという。丸山は、「華族のお坊ちゃん」が、土方の上等兵にどなりつけられている」と当時の状況を表現しており、ある意味で疑似デモクラシーがあったと語っている（丸山・飯塚・豊崎、一九四九・七五）。

丸山が「私は土着的とか日本的とかいう言葉にはほとんどアレルギーを起こすんです」（丸山、一九六八・一三六）と言っていることから、生身の大眾と向き合うことを拒絶する様子が伺える。また、政治学者京極純一による高知県知事を題材とし実体験も含めた修士論文を読んだ丸山は、「僕はよくわからないな」と言っていたという。ここには土佐の民衆が酒を飲んだり、買収したりしている世界が描かれていた（竹内、二〇一二・三一九）。ここで、先の清水と比較すると、清水は庶民の転覆戦略が根にみられ、反対に丸山は大眾を劣っている存在として抽象的に捉え、

民主主義の担い手に変えるべき存在とみなしていた。

四・三 福田恆存の保守思想

——職人街で育った経験から

福田は、清水とは旧友であり、戦後の清水の引越しを福田は手伝っている（清水、一九七五・三〇〇）。また二十世紀研究所の資金の話で細入氏が清水を訪ねた時、二人は日本橋の高島屋で福田に会っている。福田の戦後の関心は、一九四六年の論文『一匹と九九匹と』のなかでも戦中の「個人抹殺の暴力」を問題にしており（福田、一九四六・二〇一三・二三）、「悔恨共同体」と同じ方向で悩んでいたように思われる。

しかし福田は当時から、そうした危険性を「左翼と右翼のいづれを問わず」（福田、一九四六・二〇一三・二二）問題としており、二十世紀研究所の活動後、安保闘争の時期もその後も、進歩派の知識人批判を展開する。福田のその立場は一貫しており、一九九五年は「平和論の進め方に対する疑問」や、民主主義を唱える立場へ保守論客として批判していた。福田は、「民主主義の指導者に、はたして正常な生活感覚や文化感覚を期待できるでしょうか」（福田、一九五二・二〇一三・一三八）と述べており、福田は、民主主義や進歩などの知識人が考える理想的状態とは、現実の人々の生活から大きく浮いたものであると批判して

いる。「知識階級が一つの全体像として押し付けてくる世界像を、大衆はただぼんやりと眺めているだけで、それが自分達と何の関わりがあるかを容易に納得しない」(福田、「一九五二」二〇・二三・一二二)と論じ、「科学的知識というものは、そういう生活や文化から抽象された知識であります」(福田、「一九五二」二〇・一三・一六)と主張する。

福田は「認識とか理解というものは、生活の場において、一時代、一民族の文化感覚を背景にしてのみ、なりたつものにほかならない」ものであると考える。福田は、民衆の昔から受け継がれてきた知恵、生きざまが重要だと考えるため、近代教育や、人々を啓蒙しようとする知識人を批判する。福田は全体主義への対抗となるものを、人々に受け継がれた伝統的で多様な生きざまに見出しており、進歩的文化人らがそれらを壊す可能性があるとして危惧する。福田は明治以降の天皇制がもとで戦争への全体主義を生み出したと右派的立場へ批判を示すとともに、進歩的な世界観もある種の全体主義であり多様な伝統的な生きざまを破壊するものだと考える。

こうした考えは、福田が職人が多く存在する環境で育ったことも影響している。「(私は気質的には)良くも悪くも職人であり、下町人種であったのだ」(福田、一九八八・六五七)と、自分自身を分析的に述懐している。福田は「たまに訪れる母の実家はマルクスの名前さえ知らぬ職人でし

かなかった。しかし、彼らの生き方の方が、(高校のマルクス主義の同級生たちよりも)人生をともに生きているように思われた(福田、一九八八・六五七)」というように、自分がみてきた経験から、庶民の生活の方が地に足を着けたものであるように感じられた。

これから、福田と丸山の思想の元となりうるものを見出せる。つまり、福田が職人を幼少期からみてきたことから庶民の知恵や生きざまを評価するにいたったが、丸山は先にみたように庶民を自分から切り離れた存在であると捉えていた。また、清水のように庶民としての上層階級への劣等意識はなく、むしろ「庶民の生活の方が地に足を着けたものであるように感じられた」とも言うように、庶民階級に対する評価が高く、したがって庶民の受け継いだ生きざまを近代化されていけないものと見做すだけの進歩派へ批判的だったのである。

四・四 林健太郎による進歩派批判と戦争賛美論批判

——歴史研究家という立場から

林は、東大文学部長として全共闘学生と対峙し、彼は学生たちの「大衆団交」に応じながら、要求をことごとくはねつけ、九日間にわたって軟禁された。丸山と林は、ともに革新的な立場に共感をもたなかったが、それは彼らが生涯研究活動に専心したことからも、アカデミズムに価値を

おく姿勢の表れであるようにも考えられる。日本の歴史的状況を踏まえた思想構造を地道に紐解く丸山と、歴史研究者として現実に起こっている事実を認識することに価値を置いていた林は、非現実的な理想的の世界観を掲げる革新的な立場には共感し難かったのだと思われる。とりわけ林は次のように述べている。

現実には日本の社会が進歩している姿をみて、それを一層おし進める努力をすべきだと思うのに、そういう事実を無視して「革命」を説いたりするのは、ただ革命という言葉をもてあそぶものだと言われても仕方なからう。…中共の人民公社に血の道を上げる位なら、戦後日本では二百十日の災害にも拘らず毎年七五〇〇万石以上の稲作を上げられるようになったこと、そして収穫量が多ければそれだけ現金収入が増え「豊作飢饉」というようなこともないような社会体制が出来つつあること、そういう事実を認識することの方が重要である。(林、一九六〇…四五)

このような林は事実の認識が重要であると主張する。しかし、丸山と林は大衆の捉え方に相違がある。その意識の相違は、丸山と林の軍隊体験の差異から見出せる。林は、一九四四年十一月から終戦まで横須賀と武山海兵団で兵役

に就いた(戦地に赴くことは一度もなかった)。林は、年齢のために上級兵にはなれず、また専門の西洋史は軍隊では役に立たず、丸山と同様、軍では終始最下級であり、「一般の兵隊と全く同じ待遇を受けて全く同じ生活をした」(林、一九六〇…一〇五)という。

しかし、林は横須賀の軍隊訓練所で「人民」に対する理解が深まったと次のように述べる。

まちがいのないことは私が軍隊へ行つて初めて『人民』を知った、ということである。もちろんあの位の経験で本当に『人民』がわかったなどと言えるものではないが、ともかく軍隊に行かなければわからなかったことを知ったことはたしかである。私はその前から『人民』は尊ぶべきだと教えられていた。その教えは決してまちがつてはいなかったが、その意味は前に考えていたのとは少し違っていた。『人民』もただ『人間』であるからこそ面白いのであつて、またそれだからこそ大いに尊敬に値するのである。(林、一九六〇…一三〇)

林の軍隊経験には懐かしさを述懐する余裕が感じられる。「よく学校を出ているために軍隊でいじめられたという話を聞くが、私に関する限りそういうことはなかつ

た」(林、一九六〇・一一二)、「私はだれにも迫害を受けなかった」(林、一九六〇・一一三)と述べるように、軍隊で周囲から嫌な思いをさせられる経験はなかった。むしろ、林は周囲の兵隊と助け合ったり、周囲から特別扱いを受けて大切にされた経験もいくつかある(林、一九六〇・一一八)。

このように丸山と林の軍隊経験は異なるものであった。つまり先にも竹内の指摘を引用したように丸山の大家を自分から突き放すような認識は、庶民階級とのトラウマ的经验による自己防衛の側面もあると思われる。それに対し、そうした見方に林がならなかった一因は、軍で周囲と馴染んでいた経験などにもあるように思われる。大衆を啓蒙されるべき存在と一括する丸山のような進歩派とは違う立場をとる林は、庶民階級の在りのままの存在を評価していたことが背後にあると思われる。

ただ、林は福田のように庶民の保守的生きざまを擁護するの立場とも異なる。たしかに、林は進歩派への批判で「思想というものが生活から遊離していることだと思う」(林、一九六〇・四五)と述べており、人々の生活から思想が遊離しているという進歩派への批判自体は、福田と同様の意見である。しかし林は庶民を無理に理解することは必要と考えておらず、あくまでも事実に基づかない幻想を制しようとする立場であり、次のように続ける。

といったからといって、私は「進歩的」な人は貧民窟に住まっていなければならないとか、汽車は必ず三等に乗らなければならないとか言うような末梢的なことを言っているのではない。…要するに「進歩」とか「革命」とかいうことがただ頭の中でつくり上げた幻像の中だけで考えられていることが特徴である。(林、一九六〇・四五)

この部分の林の議論からは、庶民の生きざまへの評価に徹する福田と林の立場の差異を見出せる。これらは、福田は職人の生きざまを身近に感じ続けたことが庶民の生きざま擁護の思想につながったが、林の場合は、歴史家として歴史という事実認識を重要と捉えた立場に由来すると思われる。

そうした歴史研究家としての立場は、林が一九九〇年以降の戦争賛美的な大東亜戦争肯定論などに対しては許せないという意を示したことから読み取れる。林は、日本の首相が一九九三年の慰安婦問題に基づく「河野談話」で殊更に戦争責任への謝罪を述べることには反対で、「それは不要で且つ有害のおそれもある」という立場だった一方で、「いくら東京裁判が不当であろうとも、いくら欧米諸国の植民地支配に問題があろうとも、日本の侵略行為を正当化する理由にはならない」と論じる。ここには歴史家と

して事実認識にかかわる問題として、どうしても許すことができないという意識がみられる。その後、林は反発する田中正明と論争を繰り広げることになる（中島岳志、二〇一八・二一八・九）。

五 むすびに変えて

以上のように、「悔恨共同体」として一時は思いを共有した戦後日本の若手の知識人らにも、異なった経験等に基づいた思想的立場があり、その後のそれぞれの活動の相違へとつながったのだと考えられる。

清水、福田は庶民階級出身を自認していても、庶民として劣等感をもつ清水と、庶民を高く評価する福田には大きな違いがある。自らを「華族のお坊ちゃん」（丸山・飯塚・豊崎、一九四九・七五）とも例えていた丸山は、山の手育ちで庶民の生活に馴染みがなく、また悲惨な軍隊体験があつたか、大衆として人々を捉えた点が、清水、福田、林とは大きく異なる点である。たしかに、歴史研究家の林は、ともに東大教授であり生涯学界に身をおいた丸山と同様、その言語は知識層に向けられており、社会について知識人の間で議論することが重要だと考えていたともいえる。これは方々、劇作家や翻訳家としても活動した福田や、後年知識人批判も行い一般に向けて言葉を発していた清水とは

異なっている点だと思われる。しかし、林は丸山のような進歩主義とは異質の立場である。

こうしたことをみると、彼らにとって、戦争への悔恨は共通のテーマといえどもそれぞれの思いはすでに違ったものであつた。したがって、その後の歩みも含め、彼らは常にそれぞれにとっての人々が存在する「社会」に向き合ったものだといえることができる。

本稿では、各論者の「悔恨」のもつ意味の差異自体について詳しくは論じなかったが、その点も、思想性の相違を考える際に重要な論点になると思われる。本稿では限定的な分析観点のもと思想的立場を分岐させる要因を論じたに過ぎず、今後はより多くの視点が追加されて分析されるべきである。

追記

なお、本論文では、旧字体・旧仮名遣いを現代字体に書き換えている。

註

（一）ただ、スキヤンダルが元で講談社から契約を打ち切られる等をはじめ版元が度々変わっており、何度か休止期間を挟んでいる。

(鶴見・黒川、二〇〇九・四三七)

(2) ただ、研究所自体は清水の亡くなる前年一九八七年まで小規模ながら続けられた。

(3) 現代思想研究会は、一九六〇年九月に発足し一九六一年に終了した研究団体である。清水幾太郎、鶴見俊輔、樺俊雄、光子夫妻、社会学者高根正昭、政治学者香山建一らを中心に組織された(清水、「一九七五」一九九三・四九〇)。

文献

福田恆存・浜崎洋介編、「一九四六」二〇一三、「一匹と九九匹と」『保守とは何か』。

、「一九四八」一九八八、「民衆の心」『福田恆存全集』一。

・浜崎洋介編、「一九五二」二〇一三、「民衆の生き方」『保守とは何か』。

、「一九五九」一九八八、「文化破壊の文化政策」『福田恆存全集』五。

、「一九六六」一九八八、「伝統技術保護に関し首相に訴ふ」『福田恆存全集』六。

、「一九八〇」、「近代日本知識人の典型清水幾太郎を論ず」中
央公論新社五(一二三)・一三八・七一。

、「一九八八」、「覚書」『福田恆存全集』一。

人文科学委員会編、一九四七、「学会消息」『人文』人文科学委員会。
林房雄、一九六五、『大東亜戦争肯定論』中公文庫。

林健太郎、一九六〇、『移りゆくものの影——インテリの歩み』文芸春秋新社。

石田雄、二〇一三、『日本の社会科学』東京大学出版会。

久野収・鶴見俊輔・藤田省三、「一九六六」二〇一〇、『戦後日本の思想』岩波書店。

丸山眞男、一九五三、「野間君のことなど」『丸山眞男集』六。

、「一九六八」日本人の近代化と土着」『未来』五月号。

、「一九七七」一九九六、「近代日本の知識人」『丸山眞男集』一〇。

、「一九七九」、「梅本克己の思い出」『丸山眞男座談』八。

、「飯塚浩二・豊崎昌二、一九四九、「日本思想に於ける軍隊の役割」『思想の科学』五。

・古谷旬編、「一九四六」二〇一五、「超国家主義の論理と心理 他八篇」岩波文庫。

丸山・杉山光信・石川真澄「一九九五」一九九八、「夜店と本店と——丸山眞男氏に聞く——」『丸山眞男座談』九。

中島道男、二〇一八、「丸山眞男——課題としての「近代化」——」東信堂。

中島岳志、二〇一八、「保守と大東亜戦争」集英社新書。

奥武則、二〇一八、『増補』論壇の戦後史』平凡社。

庄司武史、二〇二〇、「財団法人二十世紀研究所について——国立公文書館所蔵特定歴史公文書等から——」『人文学法』五一六・一一三〇。

清水幾太郎、一九七五、「わが人生の断片」『清水幾太郎全集』第一四巻、講談社。

、「一九七五」一九九三、「美しい季節」『清水幾太郎著作集』第一四巻。

・川上源太郎、一九七二、「対談 二十世紀研究所」『季刊社

会思想』(一・三) 一八三・九八。

——・鶴見俊輔、一九六八、『対談 政治との距離』思想の科学社。

竹内洋、二〇〇一、『革新幻想の戦後史』中論公論新社。

——、二〇一二、『メディアと知識人——清水幾太郎の覇権と忘却』中論公論新社。

鶴見俊輔、一九六九・七〇、『語りつぐ戦後史——鶴見俊輔編・解説』思想の科学社。

——・黒川創、二〇〇九、『思想の科学』六十年を振り返って

『『思想の科学』ダイジェスト一九四六～一九九六』、『思想の科学』五十年史の会。

都築勉、二〇一七、『丸山眞男、その人——歴史認識と政治思想』世織書房。

財団法人二十世紀研究所、一九四五、『設立趣意書』『二十世紀研究所(設立)S二十年度』。